

格子点の図形的考察② ～2次曲線上の格子点, 有理点～

吉田 信夫

大学への数学 10年12月号 掲載

8月号では, 点列 $\{P_n(x_n, y_n)\}$ を

$$x_n = \frac{(3+2\sqrt{2})^n + (3-2\sqrt{2})^n}{2} \quad (n \geq 0)$$

$$y_n = \frac{(3+2\sqrt{2})^n - (3-2\sqrt{2})^n}{2\sqrt{2}}$$

で定めると, これらが曲線 $C: x^2 - 2y^2 = 1 \ (x \geq 0, y \geq 0)$ 上のすべての格子点であることを示した.

このように双曲線上の格子点を求める問題は, “ペル方程式” と呼ばれており, 入試問題でもよく見かける. 以前は, 天下りの的に P_n を与えたが, これを探し出す流れを見ておこう.

問題 6. 曲線 $C: x^2 - 2y^2 = 1 \ (x \geq 0, y \geq 0)$ 上の格子点を y 座標が小さい方から順に $P_0, P_1, P_2, P_3, \dots$ とおく.

(1) P_0, P_1 をそれぞれ P_1, P_2 に移すような1次変換 f を表す行列 A を求めよ.

(2) 点列 $\{Q_n(x_n, y_n)\}$ を以下で定める:
 $Q_0 = P_0, \vec{OQ}_n = A \vec{OQ}_{n-1} \ (n \geq 1)$
 このとき, $Q_n = P_n \ (n \geq 0)$ であることを示せ.

(3) P_n の座標を n の式で表せ.

解 (1) まず, $y = 0, 1, 2, \dots$ と代入して, $P_0(1, 0), P_1(3, 2), P_2(17, 12)$ であることが分かる. すると,

$$A \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3 \\ 2 \end{pmatrix}, \quad A \begin{pmatrix} 3 \\ 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 17 \\ 12 \end{pmatrix}$$

$$\therefore A \begin{pmatrix} 1 & 3 \\ 0 & 2 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3 & 17 \\ 2 & 12 \end{pmatrix}$$

$$\therefore A = \begin{pmatrix} 3 & 17 \\ 2 & 12 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 3 \\ 0 & 2 \end{pmatrix}^{-1} = \frac{1}{2} \begin{pmatrix} 3 & 17 \\ 2 & 12 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 2 & -3 \\ 0 & 1 \end{pmatrix}$$

$$= \begin{pmatrix} 3 & 4 \\ 2 & 3 \end{pmatrix}$$

である.

(2) 定義から, $n = 0, 1, 2$ のときは $Q_n = P_n$ である.

$$\begin{pmatrix} x_{n+1} \\ y_{n+1} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3 & 4 \\ 2 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x_n \\ y_n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3x_n + 4y_n \\ 2x_n + 3y_n \end{pmatrix}$$

$$\therefore x_{n+1} = 3x_n + 4y_n, \quad y_{n+1} = 2x_n + 3y_n \quad \dots\dots (*)$$

より, Q_n はすべて $x \geq 0, y \geq 0$ を満たす格子点で, $\{y_n\}$ は増加数列である. しかも,

$$x_{n+1}^2 - 2y_{n+1}^2 = (3x_n + 4y_n)^2 - 2(2x_n + 3y_n)^2$$

$$= x_n^2 - 2y_n^2$$

であるから, 帰納的に, Q_n はすべて C 上の格子点であることが分かる.

$\{y_n\}$ が増加数列なので, $P_n = Q_n \ (n \geq 0)$ を示すには, C 上の格子点が $Q_n \ (n \geq 0)$ のみであることを示せば良い.

他の格子点 R が存在すれば, それが C の弧 $Q_n Q_{n+1}$ 上にあるような $n \ (n \geq 1)$ が存在する.

ここで,

$$A^{-1} = \begin{pmatrix} 3 & -4 \\ -2 & 3 \end{pmatrix}$$

は成分がすべて整数の行列であるから, 1次変換 f^{-1} は格子点を格子点に移す.

また, $p^2 - 2q^2 = 1$ を満たす点 (p, q) の f^{-1} による像 (X, Y) は

$$X^2 - 2Y^2 = (3p - 4q)^2 - 2(-2p + 3q)^2$$

$$= p^2 - 2q^2 = 1$$

を満たす.

よって, 点 S を

$$(A^{-1})^n \vec{OR} = \vec{OS}$$

で定めると, S は格子点で,

$$(A^{-1})^n \vec{OQ}_n = \vec{OS}, \quad (A^{-1})^n \vec{OQ}_{n+1} = \vec{OQ}_1$$

から, S は C の弧 $Q_0 Q_1$ 上にあることが分かる.

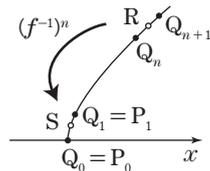
しかし, P_0, P_1 の取り方から, これは不合理である.

よって, C 上の格子点は $Q_n \ (n = 0, 1, 2, \dots)$ のみであり,

$$Q_n = P_n \quad (n \geq 0)$$

である.

(3) $x_0 = 1, y_0 = 0$ と (*) から一般項を求める.



集中講義～格子点～

$$x_1 = 3x_0 + 4y_0 = 3$$

であり, $y_n = \frac{x_{n+1} - 3x_n}{4}$ より,

$$\frac{x_{n+2} - 3x_{n+1}}{4} = 2x_n + 3 \cdot \frac{x_{n+1} - 3x_n}{4}$$

$$\therefore x_{n+2} = 6x_{n+1} - x_n \quad (n \geq 0)$$

である. 特性方程式

$$x^2 - 6x + 1 = 0 \quad \Leftrightarrow \quad x = 3 \pm 2\sqrt{2}$$

の2解を $\beta = 3 + 2\sqrt{2}$, $\alpha = 3 - 2\sqrt{2}$ とおくと,

$$x_{n+2} - \alpha x_{n+1} = \beta(x_{n+1} - \alpha x_n),$$

$$x_{n+2} - \beta x_{n+1} = \alpha(x_{n+1} - \beta x_n)$$

となり,

$$x_1 - \alpha x_0 = 3 - \alpha = 2\sqrt{2},$$

$$x_1 - \beta x_0 = 3 - \beta = -2\sqrt{2}$$

から,

$$x_{n+1} - \alpha x_n = 2\sqrt{2}\beta^n,$$

$$x_{n+1} - \beta x_n = -2\sqrt{2}\alpha^n$$

である. これらの差をとって,

$$(\beta - \alpha)x_n = 2\sqrt{2}(\beta^n + \alpha^n)$$

$$\therefore x_n = \frac{2\sqrt{2}(\beta^n + \alpha^n)}{4\sqrt{2}} = \frac{(3+2\sqrt{2})^n + (3-2\sqrt{2})^n}{2}$$

である. また,

$$\begin{aligned} y_n &= \frac{x_{n+1} - 3x_n}{4} = \frac{\beta^{n+1} + \alpha^{n+1}}{2} - 3 \cdot \frac{\beta^n + \alpha^n}{2} \\ &= \frac{(\beta - 3)\beta^n + (\alpha - 3)\alpha^n}{8} = \frac{2\sqrt{2}\beta^n - 2\sqrt{2}\alpha^n}{8} \\ &= \frac{(3+2\sqrt{2})^n - (3-2\sqrt{2})^n}{2\sqrt{2}} \end{aligned}$$

である. よって, P_n の座標は

$$\left(\frac{(3+2\sqrt{2})^n + (3-2\sqrt{2})^n}{2}, \frac{(3+2\sqrt{2})^n - (3-2\sqrt{2})^n}{2\sqrt{2}} \right)$$

である.

* * *

ペル方程式の解は, 3項間漸化式を解いて得られる. 特性解 α , β の“共役性”に注目した解法も重要である:

別解 (3) $\beta = 3 + 2\sqrt{2}$, $\alpha = 3 - 2\sqrt{2}$ とおくと,

$$\beta^n = a_n + b_n\sqrt{2} \quad (n \geq 0)$$

となる0以上の整数 a_n , b_n が存在し, しかも,

$$\alpha^n = a_n - b_n\sqrt{2} \quad (n \geq 0)$$

である. 和と差を計算すると,

$$\beta^n + \alpha^n = 2a_n, \quad \beta^n - \alpha^n = 2\sqrt{2}b_n$$

$$\therefore a_n = \frac{\beta^n + \alpha^n}{2}, \quad b_n = \frac{\beta^n - \alpha^n}{2\sqrt{2}}$$

である. 特に, $a_0 = 1$, $b_0 = 0$ である.

次に, $\{a_n\}$, $\{b_n\}$ の漸化式を作ると,

$$\begin{aligned} a_{n+1} + b_{n+1}\sqrt{2} &= (a_n + b_n\sqrt{2})(3+2\sqrt{2}) \\ &= (3a_n + 4b_n) + (2a_n + 3b_n)\sqrt{2} \end{aligned}$$

$$\therefore a_{n+1} = 3a_n + 4b_n, \quad b_{n+1} = 2a_n + 3b_n$$

である. これは, $\{x_n\}$, $\{y_n\}$ の漸化式(*)と一致し, しかも,

$$x_0 = a_0, \quad y_0 = b_0$$

なので, $\{x_n\}$ と $\{a_n\}$, $\{y_n\}$ と $\{b_n\}$ は同じ数列で,

$$x_n = \frac{\beta^n + \alpha^n}{2} = \frac{(3+2\sqrt{2})^n + (3-2\sqrt{2})^n}{2}$$

$$y_n = \frac{\beta^n - \alpha^n}{2\sqrt{2}} = \frac{(3+2\sqrt{2})^n - (3-2\sqrt{2})^n}{2\sqrt{2}}$$

である. よって, P_n の座標は

$$\left(\frac{(3+2\sqrt{2})^n + (3-2\sqrt{2})^n}{2}, \frac{(3+2\sqrt{2})^n - (3-2\sqrt{2})^n}{2\sqrt{2}} \right)$$

である.

* * *

x_n , y_n の形は, 双曲線 $x^2 - y^2 = 1$ ($x \geq 0$, $y \geq 0$) のパラメータ表示

$$x = \frac{e^t + e^{-t}}{2}, \quad y = \frac{e^t - e^{-t}}{2} \quad (t \geq 0)$$

から作った C のパラメータ表示

$$x = \frac{e^t + e^{-t}}{2}, \quad y = \frac{e^t - e^{-t}}{2\sqrt{2}} \quad (t \geq 0)$$

の形である. 実際,

$$\alpha\beta = (3+2\sqrt{2})(3-2\sqrt{2}) = 1 \quad \therefore \quad \alpha = \frac{1}{\beta}$$

であり, P_n を表す t は

$$e^t = \beta^n \quad \therefore \quad t = n \log \beta$$

である.

また, (2) から, $A = \begin{pmatrix} 3 & 4 \\ 2 & 3 \end{pmatrix}$ が表す1次変換で双曲線: $x^2 - 2y^2 = 1$ の像は自分自身であり, ゆえに, 漸近線 $y = \pm \frac{1}{\sqrt{2}}x$ も不変である. これを利用して A^n が求まる:

別解 (3) $\beta = 3 + 2\sqrt{2}$, $\alpha = 3 - 2\sqrt{2}$ とおくと, A は

$$\begin{aligned} A \begin{pmatrix} \sqrt{2} \\ 1 \end{pmatrix} &= \begin{pmatrix} 3 & 4 \\ 2 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \sqrt{2} \\ 1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3\sqrt{2} + 4 \\ 2\sqrt{2} + 3 \end{pmatrix} \\ &= (3+2\sqrt{2}) \begin{pmatrix} \sqrt{2} \\ 1 \end{pmatrix} = \beta \begin{pmatrix} \sqrt{2} \\ 1 \end{pmatrix} \end{aligned}$$

$$A \begin{pmatrix} \sqrt{2} \\ -1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3 & 4 \\ 2 & 3 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \sqrt{2} \\ -1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 3\sqrt{2}-4 \\ 2\sqrt{2}-3 \end{pmatrix}$$

$$= (3-2\sqrt{2}) \begin{pmatrix} \sqrt{2} \\ -1 \end{pmatrix} = \alpha \begin{pmatrix} \sqrt{2} \\ -1 \end{pmatrix}$$

を満たす。これを繰り返して、

$$A^n \begin{pmatrix} \sqrt{2} \\ 1 \end{pmatrix} = \beta^n \begin{pmatrix} \sqrt{2} \\ 1 \end{pmatrix}, A^n \begin{pmatrix} \sqrt{2} \\ -1 \end{pmatrix} = \alpha^n \begin{pmatrix} \sqrt{2} \\ -1 \end{pmatrix}$$

$$\therefore A^n \begin{pmatrix} \sqrt{2} & \sqrt{2} \\ 1 & -1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \beta^n \sqrt{2} & \alpha^n \sqrt{2} \\ \beta^n & -\alpha^n \end{pmatrix}$$

$$\therefore A^n = \begin{pmatrix} \beta^n \sqrt{2} & \alpha^n \sqrt{2} \\ \beta^n & -\alpha^n \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \sqrt{2} & \sqrt{2} \\ 1 & -1 \end{pmatrix}^{-1}$$

$$= \frac{1}{-2\sqrt{2}} \begin{pmatrix} \beta^n \sqrt{2} & \alpha^n \sqrt{2} \\ \beta^n & -\alpha^n \end{pmatrix} \begin{pmatrix} -1 & -\sqrt{2} \\ -1 & \sqrt{2} \end{pmatrix}$$

$$= \begin{pmatrix} \frac{\beta^n + \alpha^n}{2} & \frac{\beta^n - \alpha^n}{2\sqrt{2}} \\ \frac{\beta^n - \alpha^n}{2\sqrt{2}} & \frac{\beta^n + \alpha^n}{2} \end{pmatrix}$$

となり、 A^n を求めることができた。これから、

$$\vec{OP}_n = A^n \begin{pmatrix} 1 \\ 0 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{\beta^n + \alpha^n}{2} \\ \frac{\beta^n - \alpha^n}{2\sqrt{2}} \end{pmatrix}$$

となり、 P_n の座標は

$$\left(\frac{(3+2\sqrt{2})^n + (3-2\sqrt{2})^n}{2}, \frac{(3+2\sqrt{2})^n - (3-2\sqrt{2})^n}{2\sqrt{2}} \right)$$

である。

* * *

次は、 $x^2 + y^2 = 1$, $x^2 - y^2 = 1$ 上の有理点 (座標がすべて有理数であるような点) について考えてみよう。

問題 7. t を $0 \leq t \leq 1$ を満たす実数とする。座標平面で、2点 $A(-1, 0)$, $P_t(0, t)$ を結ぶ直線と、曲線 $C: x^2 + y^2 = 1$ ($x \geq 0, y \geq 0$) の共有点を Q_t とおく。

(1) Q_t の座標を t の式で表せ。

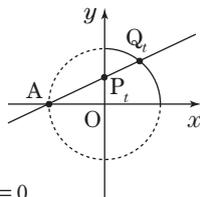
(2) C 上の有理点をすべて求めよ。

解 (1) 直線 AP_t の方程式は $y = t(x+1)$

であるから、

$$x^2 + t^2(x+1)^2 = 1$$

$$\therefore (x+1)\{(1+t^2)x + (t^2-1)\} = 0$$



$$\therefore x = \frac{1-t^2}{1+t^2} \quad (\because x \neq -1),$$

$$y = t \left(\frac{1-t^2}{1+t^2} + 1 \right) = \frac{2t}{1+t^2}$$

$$\therefore Q_t \left(\frac{1-t^2}{1+t^2}, \frac{2t}{1+t^2} \right)$$

である。

(2) t が有理数であれば、 Q_t は有理点である。

逆に、 Q_t が有理点であれば t が有理数であることを示そう。 Q_t が有理点としたら、まず、 x 座標に注目して、

$$\frac{1-t^2}{1+t^2} = \frac{2}{1+t^2} - 1$$

は有理数である。ゆえに、 $\frac{2}{1+t^2}$ は 0 でない有理数である。

すると、 y 座標に注目して、

$$\frac{2t}{1+t^2} = \frac{2}{1+t^2} \cdot t$$

が有理数であるから、 t も有理数である。

$$Q_t \text{ が有理点} \Leftrightarrow t \text{ が有理数}$$

であるから、 C 上の有理点は、

$$\left(\frac{1-t^2}{1+t^2}, \frac{2t}{1+t^2} \right) \quad (t \text{ は有理数}, 0 \leq t \leq 1)$$

である。

* * *

では、パラメータ t の図形的意味を確認しておこう。

$$Q_t \left(\frac{1-t^2}{1+t^2}, \frac{2t}{1+t^2} \right) = (\cos \theta, \sin \theta) \quad \left(0 \leq \theta \leq \frac{\pi}{2} \right)$$

とおくと、円周角と中心角の関係から、

$$\angle OAQ_t = \frac{\theta}{2} \quad \therefore t = \tan \frac{\theta}{2}$$

である。逆に、

$$t = \tan \frac{\theta}{2} \quad \left(0 \leq \theta \leq \frac{\pi}{2} \right)$$

としたら、

$$1+t^2 = \frac{1}{\cos^2 \frac{\theta}{2}} \quad \therefore \cos^2 \frac{\theta}{2} = \frac{1}{1+t^2}$$

$$\therefore \cos \theta = 2 \cos^2 \frac{\theta}{2} - 1 = \frac{2}{1+t^2} - 1 = \frac{1-t^2}{1+t^2},$$

$$\sin \theta = \tan \theta \cdot \cos \theta = \frac{1-t^2}{1+t^2} \cdot \frac{2t}{1-t^2} = \frac{2t}{1+t^2}$$

となる。

このように、 $x^2 + y^2 = 1$ ($x \geq 0, y \geq 0$) の有理点と、有理数 t ($0 \leq t \leq 1$) は、倍角公式を経由して 1:1 に対応している。

次は、 $x^2 - y^2 = 1$ ($x \geq 0, y \geq 0$) について考えよう。

問題 8. t を $0 \leq t < 1$ を満たす実数とする. 座標平面で, 2点 $A(-1, 0)$, $P_t(0, t)$ を結ぶ直線と, 曲線 $C: x^2 - y^2 = 1$ ($x \geq 0, y \geq 0$) の共有点を R_t とおく.

(1) R_t の座標を t の式で表せ.
 (2) C 上の有理点をすべて求めよ.

解 (1) 直線 AP_t の方程式は

$$y = t(x+1)$$

であるから,

$$x^2 - t^2(x+1)^2 = 1$$

$$\therefore (x+1)\{(1-t^2)x - (t^2+1)\} = 0$$

$$\therefore x = \frac{1+t^2}{1-t^2} \quad (\because t \neq \pm 1, x \neq -1),$$

$$y = t \left(\frac{1+t^2}{1-t^2} + 1 \right) = \frac{2t}{1-t^2}$$

$$\therefore R_t \left(\frac{1+t^2}{1-t^2}, \frac{2t}{1-t^2} \right)$$

である.

(2) t が有理数であれば, R_t は有理点である.

逆に, R_t が有理点であれば t が有理数であることを示そう. R_t が有理点としたら, まず, x 座標に注目して,

$$\frac{1+t^2}{1-t^2} = \frac{2}{1-t^2} - 1$$

は有理数である. ゆえに, $\frac{2}{1-t^2}$ は 0 でない有理数である.

すると, y 座標に注目して,

$$\frac{2t}{1-t^2} = \frac{2}{1-t^2} \cdot t$$

が有理数であるから, t も有理数である.

$$R_t \text{ が有理点} \Leftrightarrow t \text{ が有理数}$$

であるから, C 上の有理点は,

$$\left(\frac{1+t^2}{1-t^2}, \frac{2t}{1-t^2} \right) \quad (t \text{ は有理数}, 0 \leq t < 1)$$

である.

* * *

単位円の場合とほぼ同じ解答となった.

図形的に解釈していこう. 結果から分かる通り,

$$A(-1, 0), P_t(0, t),$$

$$Q_t \left(\frac{1-t^2}{1+t^2}, \frac{2t}{1+t^2} \right), R_t \left(\frac{1+t^2}{1-t^2}, \frac{2t}{1-t^2} \right)$$

は, 同一直線上にある. さらに,

$$t = \tan \frac{\theta}{2} \quad \left(0 \leq \theta \leq \frac{\pi}{2} \right)$$

となる θ をとると, $Q_t(\cos\theta, \sin\theta)$ であり,

$$\frac{1+t^2}{1-t^2} = \frac{1}{\frac{1-t^2}{1+t^2}} = \frac{1}{\cos\theta}$$

$$\frac{2t}{1-t^2} = \frac{1+t^2}{1-t^2} \cdot \frac{2t}{1+t^2} = \frac{\sin\theta}{\cos\theta} = \tan\theta$$

$$\therefore R_t \left(\frac{1}{\cos\theta}, \tan\theta \right)$$

である. 図形的には, Q_t における円 $x^2 + y^2 = 1$ の接線

$$(\cos\theta)x + (\sin\theta)y = 1$$

と x 軸の交点 S が $S \left(\frac{1}{\cos\theta}, 0 \right)$ であり,

$$SQ_t = SR_t = \tan\theta$$

となっている (上図参照).

最後に, 双曲線 C のもう 1 つのパラメータ表示

$$x = \frac{e^\varphi + e^{-\varphi}}{2}, \quad y = \frac{e^\varphi - e^{-\varphi}}{2} \quad (\varphi \geq 0)$$

を考える. これらは双曲線関数 (hyperbolic function)

と呼ばれ,

$$\cosh\varphi = \frac{e^\varphi + e^{-\varphi}}{2}, \quad \sinh\varphi = \frac{e^\varphi - e^{-\varphi}}{2}$$

と表す (双曲余弦, 双曲正弦). もちろん, 双曲正接は

$$\tanh\varphi = \frac{\sinh\varphi}{\cosh\varphi} = \frac{e^\varphi - e^{-\varphi}}{e^\varphi + e^{-\varphi}}$$

である. これらは, 三角関数と類似の性質を多くもつが,

上記の関連として, 以下を挙げておこう:

$$R_t \left(\frac{1+t^2}{1-t^2}, \frac{2t}{1-t^2} \right) = (\cosh\varphi, \sinh\varphi) \quad (\varphi \geq 0)$$

とおくと,

$$\frac{e^\varphi + e^{-\varphi}}{2} = \frac{1+t^2}{1-t^2} \quad (t \geq 0, \varphi \geq 0)$$

より

$$(e^\varphi + e^{-\varphi})(1-t^2) = 2(1+t^2)$$

$$(e^\varphi + 2 + e^{-\varphi})t^2 = e^\varphi - 2 + e^{-\varphi}$$

$$\therefore t^2 = \frac{e^\varphi - 2 + e^{-\varphi}}{e^\varphi + 2 + e^{-\varphi}} = \frac{\left(e^{\frac{\varphi}{2}} - e^{-\frac{\varphi}{2}} \right)^2}{\left(e^{\frac{\varphi}{2}} + e^{-\frac{\varphi}{2}} \right)^2}$$

$$\therefore t = \frac{e^{\frac{\varphi}{2}} - e^{-\frac{\varphi}{2}}}{e^{\frac{\varphi}{2}} + e^{-\frac{\varphi}{2}}} = \tanh \frac{\varphi}{2}$$

である.

これは, $Q_t(\cos\theta, \sin\theta)$ が半角の正接 $t = \tan \frac{\theta}{2}$ で表されるのと同様である.

(よしだ のぶお, 予備校講師)